



## 幼児教育雑感

波多野完治

去年から今年にかけて、種々の変化が幼児教育の間にかけてきた。その一番中心となるものが、「幼児教育の危機」の問題である。それについて少し考えてみようと思う。

幼児教育の危機の問題を最初にとりあげたのは坂元彦太郎氏である。今年の「幼児の教育」四月号に、「幼児教育の危機」を坂元氏がとりあげたのはじめで、六月号に秋山ちえ子氏が「幼児教育の危機の反省」をかいており、七月号で牛島義友氏が「幼児教育の危機をよんで」というのをかいている。私も、坂元氏の論文を読んで感ずるところがあり、書きたいことがあったが、忙しくて書く暇がないので、ある雑誌で坂元氏と対談することにした。

坂元氏は、幼児教育、いわゆる幼年教育を人生の教育の最も重要なものと考えている。幼年教育とは、小学校二年までと幼児期の全体を含めて考えたもので、この時期が最も大切であると考えるのである。坂元氏は、文部省におられる時から、こういう風に考えておられ、岡山大学に行つてからは、充分その構想を生かして幼稚園を創り、また、幼児教育のために種々の先進的啓蒙をやつていられたが、今年の二・三月号から「幼児教育の危機」の問題を非常に心配され、その結果がこの論文となつてあらわれたのである。

「幼児教育の危機」は幼児数が減つたことが直接には原因であるが、それに派生して、いろいろな問題が起つて来た。このことが、坂元氏に「幼児教育の危機」という印象を与えた。園児が少くなつ

たことは、たださえ園児過剰に悩んでいた現場の教師には、危機どころではなく、立派な教育をする機会が与えられた訳である。今ま公立幼稚園には、五十名以上も幼児を収容しているところがあつた。このような状態で良い教育のできるはずはない。むしろこの園児の多かつた時こそ危機であり、減つた現在では軌道にのせる最も良い機会である。これが「危機」といわれるのは、どういうわけであらうか。

私の考えるところでは、わが国の幼児教育が現在過渡期にある当然の結果である。わが国の幼児教育は政府の保護によってなされたのではなく、民間の本当に子どもの好きな人によって育てられた。すなわち、私立幼稚園、あるいは野党的幼稚園が幼児教育に當つてきた。この意味において、幼児教育はわが国の文学や映画と同じような精神的状況を持つと考えられる。わが国の文学は政府の保護なしに育つてきた。たとえば、夏目漱石は全く保護を受けておらず、幸田露伴は後になって文化勲章を受けてはいるが、それは、それを受けるほど長生きをしたためである。今日の映画にしても政府の保護は受けていない。

幼児教育に対して、昔は「幼児は教育すべきものでなく放つておけば良く、小学校にはいつてから教育すれば良い」という考えの小

学校教師がいた。現在でも少数ではあろうが思う。かれらは、幼稚園では余計なことを教えない方がよい」と考える。

しかし、幼児尊重の思想が大事にはぐくまれていった温床は、キリスト教的ヒューマニズムであつた。ゆえに我が国の幼稚園発達史はキリスト教なしには考えられない。

しかし、世の中の人は、次第に動かされてきた。その影響で戦後になり空前の優勢をきたした。これがいわゆる幼稚園ブームである。ブームとなつてからの幼稚園には種々の問題はあつたが、野党的精神といおうか、子どもと密着して行われたのだから、わが国の幼児教育は小学校以上の教育とは非常に異なる。小学校以上の教育は、昔は壮丁教育（軍隊）の子備教育的性格があり、大正以後、その傾向が強くなつてきた。太平洋戦争以後は殆んどまったくこの性格を持つ。このように上からの要請によってなされたのが、小学校教育だが、幼児教育はそうでなかつた。だから幼児教育がヒューマニストたちに魅力があつたといえる。このような幼児教育を發展させたのが、亡くなった倉橋惣三氏だつた。彼の自由主義的教育思想に対して戦争中に迫害が加えられたことがあつた。これは極端な形の時きは幼稚園無用論とさえなつた。しかし、それにもかかわらず戦争中幼稚園をとまかく温存することができたのは、彼の政治力と

人格の賜物であったといえるが、このような野望的ヒューマニズムの精神が戦後のブームで崩れてくる傾向がみえた。これは戦後の社会要求が、幼稚園教育を義務制化しなくてはならぬということろまで一般の人々を啓蒙したからである。幼児教育に特殊の制度を必要としたのは、三百年も昔から先覚者が考えていたことであるが、今日では、それが極く一般的な性格になってきている。凡ての父母がこの自覚をもっているのである。これには、社会状況の変化が反映していることを忘れてはならない。現在、世の中には、昔のような家庭がなくなり、新しい家庭形態がつくられつつある。これは、家庭の崩壊、家庭の変化などいろいろな名で呼ばれるが一口にいうと、この家庭は「孤独なる群衆」と呼ばれるところの社会で、社会の凡ての人は群衆であるのに、その一人一人の間に連帯意識はなく、皆、孤独である。この孤独な群衆を大衆社会(Mass Society)という。大衆社会を正しく運営していくためには、家庭教育だけでは不十分で、特別の施設があることになり、これが幼稚園の必要性を一般の人たちに考えさせるようになった。幼児を幼稚園に入れる方が良いか否かの質問をよく受けるが、これは、特別な施設が必要なことは知っているが、現存している幼稚園の形態が民主的の社会を発展させていくのに十分な教育形態をとっているか、という疑問からで

ある。現実の幼稚園教育をもっと異った民主的な世の中に発展させていくような教育形態を備えている幼稚園もあるが、そうでないものもある。特別の施設が必要だというのは、父兄の間に啓蒙が普及してきたからだと思う。それにもかかわらずおどろくべき反時代的な論文が「幼児の教育」六月号に秋山ちえ子氏によってかかれていゝる。「幼児教育の危機に対する反省」という題で、「幼稚園というものは、普通の子どもにとっては必要でないのだ。」と述べており、次の文章はそれを裏付ける。「幼稚園に行く子は、一人っ子で、幼児の社会生活が十分できないとか、環境が悪い子などが主になるのが理想ではなからうか。」

今日のマス・ソサイティを悲しむべき事態であると感じ、何かの形でもう少し良いものにしていかねばならないと考える人たちは、このような「幼稚園教育無用論」には多分同意しないだろう。この論文は「今の世の中は家庭教育が充分行われれば、幼稚園教育は無用である。すなわち、幼稚園は家庭の補助であるというのである。」が今の幼稚園は独自の教育機関であり、今日の近代社会にはない、必要なものである。これがなければ子どもの円満な人格は形成されない。これが今日の一般的な考え方であろうとおもう。幼稚園にい

かない子でもいった子とおなじように小学校で成功するではないかといわれるが、それは小学校で幼稚園の肩代りをしているのである。本当は幼稚園でしなければならぬことを六年間少くとも小学校三年までで一生懸命やっている。このことは望ましくない。この

点から考えると幼稚園の必要性は今日わかつてきているが、この必要性とそれに応ずる社会的施設、財政的援助が不足しており、両者のギャップが「幼児教育の危機」になったと私は考える。「幼児教育の危機」はそのギャップが存在する限り当分続くと思う。これをやめる方法としては、「幼児教育」はどうしても必要であり、これをやっておかなければ、子どもの人格が非常に育ちにくいという基本原則をはっきり自覚しておく必要がある。もちろん、特殊の子どもは立派に成長するだろうが、その場合には子どもも、教師も苦勞しなければならぬ。本質的には幼稚園の必要なことを関係者が理解してその認識に基いて、実際に世間の人々に示していくことが必要であるが、今日それが不十分のように思われる。スクールバスで園児のおくりむかえをするといった末しょう的なことよりも、実際に幼稚園の中の教育形態が進むことが必要で、これには幼稚園教員の学識、教養、教育的識見の向上が必要になってくる。昔は、小学校教

員よりも幼稚園教員の方が高かったが、今日では必ずしもそうでない。社会の要求があるので、小学校よりもすくない教養で幼稚園教員になる。ここにもずれがあるのかもしれない。

近頃「義務制幼稚園」ということをいう人がいるが、私はそのようには必ずしも考えていない。これについては長くなるのでここでは述べないが、法律でもって教育を義務制にするのでなく、父親・母親が「幼稚園が必要だ」と感じるように、両親を啓蒙しなければうそである。日清戦争の頃は、とくに百姓の家庭では、親は、子どもは学校へ行っても何の役にも立たず、行かせる必要はないと考えていた。今日では農民でも小学校教育の大切なことはわかっている。今日の小学校教育のように、どうしても必要だと考えさせる段階までいかななくてはならない。それには、幼児教育の必要性を父兄に本当にわかってもらう方法をとることである。義務制という法的やり方で急場をきりぬけようとしてもうまくいかない。大事なものは、父親、母親の心の中である。

× × × ×